

カイトボーディングってどうして？

こんなにはまっている人たちを見るのは久しぶりです。みんなほかの話をしているときは普通なのに、やたらカイトの話になると目をきらきらさせながら熱く語ってやみません。

もちろん若い人たちも一生懸命なのですが、お歳を召した方(ごめんなさい)の中には不思議なモノを自分で作ってしまう人たちが多く見受けられるようです。

そんな中で今回は、リール式のバーを作ってしまった人たちを紹介したいと思います。

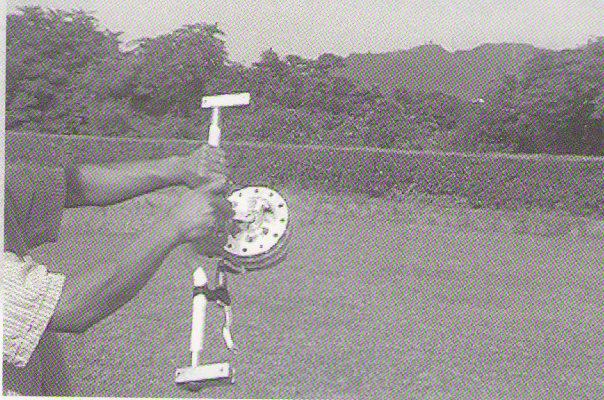
まず一人目は、九州は唐津のHOPSオーナーの吉末さん。話には聞いていたのですが、行って見てまずたまげたのは彼の使用するカイト！なのです。

アメリカ航空宇宙局のような名前のこのカイトはなんとラムエアでもインフレーターでもないただの風。でも吉末さんはこの風でサーフボードを改造したカイトボードでクロスオンの唐津の波打ち際近くをどっわっどっ走ってしまいます。

吉末さんによると、フランス在住の怪しげな日本人が持ってきたらしく、ニュートラルに揚げてもらっても真上まで上がらず、風が強いときは誰かに抑えてもらわないと引きずられてしまうとのこと。(ってことは、カイトが実際の風より風上に行かないから上らないということですね？)

多分、皆が使っているようなカイトを使用したら、かなり上れているのでは？と思うのですが…。

でも本当に私が感心したのは、吉末さんが発明した自動糸だ



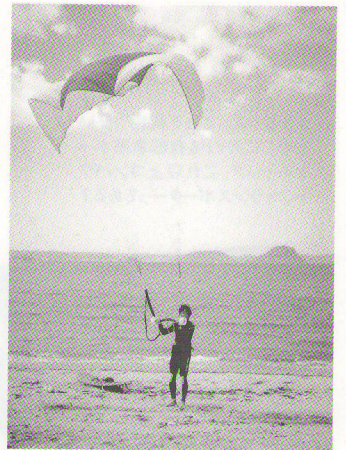
し機能付きのコントロールバーなのです。どんなモノかと言うと、バーの両端にリール状のモノがインサイドのリングとアウトサイドのリングが重なって付いていて、薄っすらとサドル状の形をしたバーに繋がっています。そしてこのバーを握る手を緩めるとラインが少しづつ出ていき、ハーネスを架けるとロックされる仕組みになっています。

変なもの作りよったなーと
思っていて、先日アップカイトの林君のところへ寄ったら、ユーピーからパクッてきたアメリカのカイト雑誌にそっくりな物があってびっくり！！
FRABEE
(FLOWBEEかもしれない)と呼ばれるこのコントロールバーは発明として記事になり尚かつ広告まで出ていたので二度びっくり。

吉末さんは常々「ここは田舎じゃけんいろいろ情報が欲しかとねー」とか言っていたのですが、ぜんぜんあなたのほうがすごいと思います。今度行ったときは改良版ができていてもいいかもしれません。また見せてくださいねー

二人目の発明家は四国で会ったOCEAN AIRのホリガミ君(彼の名刺はすべてローマ字で、FAXでのやりとりでもカタカナで書いてあるのでどんな漢字を書くのか未だに知りません)(線上と書きます…編集部注)のお父さんがなかなかの凝り性で、アルミの削りだして3分の1とか4分の1とかの力で巻き取れるリール式のバーを3セット程作っていました。でも3分の1の力で巻き取れるということは、ローラーを3倍まわさなきゃいけないということですからやはり行き着くところは電動リールなんではないでしょうか？

話は変わりますがホリガミ君のところもそうですが、東海X-FLYの森君、TOP OUTの河部君とみんな本人以上にカイトに熱いお父さんがいらっちゃって、皆さん「息子がメインですから」とか何とか言いながら随分サポートしながら自分がはまっているのがみえみえです。だって皆さん語り口がとっても「あついで」ですもん。



赤土 正剛(あかどせいご)

1952年2月9日生まれみずがめ座のO型
身長186cm 体重95kg
元ウィンドサーフィン ワールドカップ選手。
現在もしぶとく国内プロサーキットに出場している。
白峰温泉スノーボードスクール校長、日本スノーボード協会安全対策委員長カイト歴 1年。
初めてカイトでジャンプしたら、以前マウイ島でウィンドの練習していたときにマストハイの波で思いっきり飛んだよりも高く飛べて(多分高さ6mくらい) それ以来めちゃくちゃカイトにはまっている。

※ロガロ式ウイング…NASAの研究者であるフランス・ロガロ氏が宇宙船回収用に開発した翼のこと。(編集部注)